

「日本のカツオ漁」業界を
御前崎から支える

藪田 晃彰 さん



▲11月に完成した「第百十一日光丸」



PROFILE

やぶた てるあき(女岩区・43)
日光水産株式会社代表取締役社長。
全国遠洋鯷一本釣船主協議会、御前崎
船主同盟会の会長を務めている。

日本一のカツオ漁船

真新しい船体を白く輝かせ、御前崎港中央埠頭に入港した船、遠洋カツオ一本釣りの漁船「第百十一日光丸」。この漁船は、市内の水産会社「日光水産株式会社」が新造した。同社が保有している従来の船よりも100ト大きく、全長が68・75メートルある。漁師が一本ずつ釣り上げたカツオをマイナス20度で瞬間冷凍し、マイナス50度で冷凍保管できる設備を備え、最大約460トを積むことができる。国内でも最大級の遠洋カツオ漁船である。社長の藪田晃彰さんは「船の完成が遠洋カツオ一本釣りの漁の業界再活性化につながればうれしい」と話した。

ふるさとを大切に思う

藪田さん自身が持つカツオ漁への思いは、御前崎に根付いた考え方からだと話してくれた。全国遠洋鯷一本釣船主協議会の会長も務め、世界の舞台でも活躍を見せる。国策を守るため、最前線で諸外国と難しい交渉をするなど苦労も絶えないが、思いが強い分やっつけて楽しいという。ま

た、世界と比較しても「御前崎はまだまだ戦えるすばらしい地域だ」と力強く語った。

一方、市内全ての小学校や図書館へ漁業の本を寄贈したこともある。「地元の基幹産業である漁業の魅力、御前崎の魅力を知ってほしいし、御前崎から日本一の漁師を育てたい。素晴らしいふるさとを大切にしている人が増えてほしい」と夢を語った。

チャレンジし続けること

かつては50隻以上あった御前崎のカツオマグロ漁船が、今では5隻となった。現在は決して景気がいいとは言えない中で、独自の冷凍技術を考えたり、生き餌のイワシについて大学や水族館と研究し技術開発に携わるなど、多くのことに挑戦してきた。藪田さんが今年の成人式で新成人に「成功の反対は失敗ではなく、何もしないこと。待っていても成功しない。夢を持ってチャレンジし続けることが大切」と応援メッセージを送っていた姿が思い起こされた。漁業界を支える牽引力が、御前崎の漁業のさらなる発展へつながることに期待する。